

子どもの性の商品化

—需要と供給はどこにあるのか—

東京都青少年問題協議会委員 仁藤 夢乃

私は家庭や学校、ほかのどこにも居場所がないと感じている高校生を「難民高校生」と呼び、孤立・困孤立・困窮状態にある少女を支える活動を行っています。夜の街を巡回し、終電前後に家に帰らずにいる少女たちへの声掛けや相談事業。十分に食事をとることができていなかったり、ネグレクトを受けたりしている少女への食事提供。虐待を受けていたり、DV、強姦、児童買春や人身取引などで性暴力の被害にあったりした少女たちが夜間に駆け込める一時シェルターの開設、自助グループの運営。少女を取り巻く実態を大人向けに伝える啓発活動や夜の街歩きスタディーツアーなどを開催しています。

相談は全国から寄せられ、北海道から沖縄まで、少女たちと出会い関わっています。昨年度は1年間で84名の少女と出会い、人身取引や性的搾取の被害にあった少女からの相談が多くありました。JK（女子高校生）ビジネスに関わる少女が58名、個人売春をしている少女が23名、斡旋者の下で管理売春させられている少女17名とも出会いました。中には、知的障害、発達障害の少女が狙われ搾取されているケースもあり、被害に遭った少女が自傷行為や自殺未遂を行うケースも後を絶ちません。

■「難民高校生」だった高校時代

10年前、私も高校だった頃、母親の鬱病や両親の離婚から家庭が崩壊し、家にいられず月に25日、街を徘徊する生活を送っていました。家族と顔を合わせれば暴力が飛び交うため、親が仕事に出る日中に家で仮眠し、夕方に

街に出て、ファーストフードや漫画喫茶、居酒屋、カラオケの他、ビルの屋上で一夜を明かしたこともありました。雑居ビルの屋上に段ボールを敷いて生活するホームレス状態の男子高生の友人もいました。

繁華街で少年補導が厳しくなる中、住宅街や郊外に隠れるようにして朝を待っていました。街には、全国各地から居場所をなくした中高生が集まっていました。このままではよくない、どうすればと不安を抱えながらも、頼れる大人、信じられる大人はいませんでした。高校には楽しく通っていましたが、夜眠れない日が続き、学校への遅刻や授業中の居眠り、欠席が増え、教員からも注意されるようになりました。なぜ寝てしまうのか、家庭での不安や生活の不安定さについて、教員には打ち明けられませんでした。親を悪くいたくない、親を悪く思われたくない、親に自分の不安をばらされたくないという想いがありました。

「大人はわかってくれない」という子どもたちの声を、みなさんも聞いたことがあるかもしれません。それは、「向き合ってくれる人がいない」という心の叫びだと今になって思っています。今でも、そうした少年少女に路上やネット上で声をかけるのは、手を差し伸べる大人ではなく、違法の仕事を紹介するスカウトや、買春者ばかりです。少女の場合は、買春者や、JKビジネスや違法の風俗店や児童買春の斡旋業者。少年の場合は振り込め詐欺の受け子や、違法の建築作業や除染作業に斡旋する業者が声掛けをしています。渋谷や新宿などの各繁華街では、每晚100人ほ

どのスカウトが街に立ち、少年少女に声をかけていて、困っている少年少女が支援につながる前に、危険に取り込まれています。

■日本における人身取引 「JKビジネス」の実態は

現在、社会問題となっている女子高生の未熟さを売りにした「JKビジネス」は、児童買春の温床となっており、ここで働くうちに性暴力を受け、心身ともに傷を負った少女と出会っています。東京・秋葉原では、2メートル間隔で少女が立ち、客引きをしています。「お散歩いきませんか?」「ご飯食べませんか?」と男性に声をかけています。私は、ここで働いた少女80名以上と関わっていますが、その全員が客引き中、買春や性交渉を持ちかけられています。

警視庁の発表によると2013年、JKビジネスは東京だけで200店舗存在し、1年間で101人の少女が保護、補導、逮捕されています。米国国務省が2014年に発表した人身取引報告書では、日本で家出した10代少女が買春の被害を受けていることや、「JKお散歩」が児童買春の温床になっていることが指摘されているが、日本政府は十分な対策を行っていません。

JKビジネスには、様々な業態があります。女子高生を撮影する「JK撮影会」、少女との会話を売りにした「JKコミュニケーション」「JKトーク」、ゲームが出来る「JKプレイルーム」、少女による占いや、カウンセリング店などが、風営法にひっかからないグレーゾーンで営業し、摘発とのいたちごっこで存在しています。

経営者たちは、組織的に巧みに少女を勧誘しており、ブログや、ツイッター、ラインなどのSNSに求人を掲載し、街でスカウト行為を行っています。「観光案内のアルバイト」という求人を見て

面接に行ったら「男性とデートをする仕事だ」と言われ、学生証のコピーをとられてしまったので断れずに当日働くこと、カラオケや漫画喫茶で客から性行為を強要された少女。街で「スカウト」を名乗る人物に声をかけられ、「仕事を紹介する」と言われたり、「大手芸能事務所が運営するカフェ」や「撮影スタジオ」であるとだまされたりし、ポルノ動画を撮影された被害もあります。中には、小中学生が被害に遭うケースもあり、被害にあった子どもの多くは、親や友達への発覚を恐れ、誰にも相談できずにいます。

■「普通の子」まで取り込む手口

JKビジネスで働く少女たちは、3つの層に分けられると考えています。①貧困層 ②不安定層 ③生活安定層です。①経済的困窮家庭の少女や、②家庭や学校に何らかの困難を抱えている少女のみならず、③両親との仲も学校での成績もよく、将来の夢もあって受験を控えているような「普通の」女子高生が、リフレやお散歩の現場に入り込んでいます。

そうした少女たちは、LINE、カカオトーク、ツイッター、ブログやゲームのメッセージ機能などを通して求人情報を得たり、仕事に誘われたりしています。たとえば「もえなび」というサイトには、JKビジネス店の求人が東京だけで数百店掲載されており、このサイトを経由して店にアクセスし、被害に遭った少女と多数出会っています。少女を利用する大人たちは、青少年に馴染みあるツールや文化の中に入り、誘い込んでいるのです。

JKビジネスが、困難を抱えていない少女にまで一般化していくと、貧困状態にあたり、コミュニケーションが苦手だったり、自信がない、障害をもっている等、困窮度が高い少女は生活

に必要な稼ぎを得られなくなります。その結果、売春宿に囲われたり、より痛い、臭い、汚いところで性奴隷のように働かされたりし、人間以下の扱いを受けた少女とも出会っています。危険に取り込まれた少年少女たちは、「非行少年」と呼ばれ、取り締まりの対象となりますが、経済的に困窮し、「生理用品が買えない、今日食べる物が無い」と話す少女、「給食費や修学旅行費を支払うため」に売春に足を踏み入れたと話中高生もいます。

父親からの性的虐待を背景に、「家においてお父さんにヤラレルよりまし」と、宿泊場所を求め、売春行為を繰り返していた少女を警察が補導した際には、親に連絡し、家に帰されるだけで背景への介入は行われませんでした。親が売春斡旋していたケースでも、「簡単に稼げるからって、こんなことしていいと思ってるのか」と怒鳴られ、少女はほんとうのことを話せませんでした。

私は、少年少女が警察に発見され、補導されたとき、それをきっかけに背景への介入や、必要なケアに繋がるような「ケア付きの補導」が必要だと考えています。

■児童福祉から取りこぼされる子どもたち

私たちは児童相談所や警察、医療機関などへの同行支援も行っていますが、困難を抱えた少女たち、とりわけ性犯罪に巻き込まれたり、性被害にあったりした少女が公的支援を受けることにとても高いハードルを感じています。

夜間巡回中、街で声をかけた少女に「保護じゃないよね?」「児童相談所に連絡しないよね?」と、怯えた様子で言われることがある。少女たちの間では「保護」が恐れるべきものとなっていることも少なくありません。児童相談所で職員から不適切な対応を繰り返

されていたり、一時保護所で、人権をないがしろにされる扱いを受けたりした子どもたちです。

児童相談所の体制が、困難を抱える青少年の実態と合っていないことも、日々感じています。例えば、児童相談所の開所時間は多くが平日の8:30~17:30だ。その時間は学校があるため、安全に過ごせている子も多いのですが、夜間や土日祝日、親が家にいる時間帯に困った時、駆け込める場はありません。金曜日の16時頃、虐待を受け自殺未遂を繰り返す少女が相談をしたら、「もうすぐ閉館だし土日は休みなので、月曜日にまた電話をしてください」と言われたこともあります。

保護者からの虐待を理由に家出し、売春をして生き延びていた15歳の少女の相談に行くと「売春や家出をしているなら施設では保護できない」、「精神的に不安定なら病院へ」とたらいまわしにされ、以前入院していた精神科医でも「この子だけは勘弁してくれ」と受け入れ拒否をされたこともあります。

児童相談所が、家庭の十分な調査なしに、少女に「性依存症の自助グループ」を紹介したこともありました。少女は性依存症だから売春しているのではなく、虐待から逃れるため、夜間泊まれる場所を探して生活をしていたのに、です。その少女はその後、囲われていた売春宿に戻ってしまい、その結果、15歳にして卵巣を1つ摘出、16歳になってもう片方の卵巣を摘出することになってしまいました。

児童相談所や警察、その他の機関に相談する際、子どもたちには「自ら足を運び、大人がわかるように被害の詳細を整然と伝える」ことが求められますが、虐待や性被害にあっている子どもたちが、自ら助けを求めて声を上げることは簡単ではありません。その多くが、これまで学校のカウンセラーや行政の教育相談室などで「誰にも言わ

ない」約束で相談したにも関わらず、親や教員にその内容を知らされてしまう等の経験をしており、大人を信頼できずにいる子どもたちです。

一方、スカウト組織や買春者は、少女少女に必要な「衣食住+関係性」を、支援より先に与えています。帰るところがないのなら「寮」を、補導から逃れるための「宿泊場所」を提供し、時に食事を与え、学習支援をしている店もあります。彼らは少女たちを「担い手」として捉え、仕事を与えて取り込むやり方を行っています。私たちは、少年非行を単なる非行として捉えるのではなく、背景にある困難や、支援の不足、危険に取り込む大人の巧みさを考えなければなりません。

■少女は売春に気軽に 足を踏み入れているのか

児童買春で行われているセックスは、恋人や夫婦間で行われるものとはほど遠いものです。中高生、中には13歳以下の少女が性器に野菜を入れられる、裸で公園を歩かされる、手足を拘束され目隠しされ顔に排泄物をかけられる、強姦される、性器を裂かれる、その様子を動画で撮影される等しています。これは性暴力であり、売春経験のある少女たちの語りは、性暴力被害者の語りと同様です。彼女たちは、精神的にも肉体的にも傷つけられ、自尊心を失っています。

日本では、児童買春について「少女が気軽に足を踏み入れている」と、少女の貞操感や自己責任論で語りたがる風潮があります。しかし、中学生が「SNSで売春を募集しよう」とある日突然思いつくのでしょうか。そんなところに、「気軽に」足を踏み入れたいと思うのでしょうか。彼女たちの多くは、ネットや街で出会った大人に売春のやり方を教えられています。JKビジネスで

も、SNSを使った管理売春でも、一見少女自らが男性を誘っているように見えますが、裏には、彼女たちを管理する大人が存在します。子どもの性の商品化の需要と供給は、「売りたい大人」と「買いたい大人」間で成り立つものであり、そこに未熟な少女、とくに孤立・困窮した少女たちが「商品化」されているのが実態です。

しかし、メディアでも、児童買春問題は少女の売春問題、少年非行問題として取り上げられ続けています。先日、神奈川県で16歳の少女が売春防止法違反で異例の逮捕された際にも「売春で得た金を、洋服や映画代にしていた」と様々なメディアが報道しました。確かに服や映画代にも使用したのでしょうか、少女は長い間家に帰らずにいたといいます。きっと、売春で得たお金をマンガ喫茶でのシャワー代や食費、生活費にも充てていたはず。「シャワー代や生活費にしていた」と報道するだけでも、ずいぶん印象が変わります。彼女には、家に帰りたくない、帰れない事情があったのではないかと、私は想像します。

■大人は環境問題！

子どもにとって、大人は環境問題です。家庭や学校、相談機関などで適切な養育や対応をされない子どもがこれ以上増えないように、また、そうした子どもたちを支えられる大人が増えるように、大人たちで現状を変えていきましょう。違和感をもち、気付いている大人が、大人や体制を変えることを諦めてしまえば、現状は変わりません。

また、自信を失くした子どもたちの多くは、先に「大人に諦められた」と感じる経験を持っています。大人の諦めは、子どもに伝わります。子どもたちは、敏感に感じ取ります。

荒れていた高校時代、朝帰りする私

に声をかけてくれたおばあさんがいました。「おはよう。寒いわね。風邪をひかないようにね」と。そんな当たり前の声掛けを私にしてくれる人、こんな私に気付いてくれる人がまだいたんだと、おばあさんとすれ違ってから、涙があふれたのを今でも覚えています。困難を抱える中高生と関わる中で、私もめげそうな気持ちになることもありますが、諦めず、めげずに声をかけ、関わり続けたいと思っています。

私たちは、すべての少女が「衣食住」と「関係性」を持ち、困難を抱える少女が暴力を受けたり、搾取に行き着いたりしなくてよい社会を目指し、活動しています。困っている人の一番の困りごとは、「助けて」と言えないこと。「あなたはどうしたい？」と問われても、それがわからないことです。混乱した生活の中、落ち着いて考えられる環境や一緒に状況を整理してくれる人との信頼関係や体験があって初めて自分の状況を見つめ、向き合うことができます。

私たちは、少女が夜間に自ら駆け込めるシェルターを開設し、食卓を囲む

時間や体験を共有し、何気ない日常を積み重ねることで互いを知り、困った時に頼れる信頼関係を築きたいと考えています。ほとんどの場合、抱える問題はすぐに解決できることではない。だからこそ長い目で付き合い、喜びや苦しみを分かち合い、泣き、笑い、怒り、共に歩める伴走者でありたいです。

プロフィール 仁藤 夢乃

1989年生まれ。中学生の頃から街を彷徨う生活を送り、高校を2年で中退。

その後、予備校で出会ったある講師との出会いから農業、国際活動に触れ社会活動を始め、明治学院大学社会学部に進学。

友人らが路上を彷徨う生活から抜け出せずにいることから高校生に目を向けた活動を始める。

現在、「居場所のない高校生」や「搾取の対象になりやすい青少年」の問題を発信するとともに、日常的な関わりを通して少女の支援を行っている。

2015年より第30期東京都青少年問題協議会委員を務める。

著書に『難民高校生』（英治出版 2013. 3）、『女子高生の裏社会』（光文社新書 2014. 8）。

本を紹介します

親と子と教職員の教育相談室 徳永恭子

トラウマの心理学 一心の傷と向き合う方法— 小西 聖子 2012年 NHK出版

この本の著者小西聖子（こにしたかこ）さんは、武蔵野大学教授で精神科医、臨床心理士です。被害者学、トラウマケアが専門で、特に犯罪被害者のトラウマ、PTSDの研究と援助の実践をやっておられます。

この本では、トラウマの定義やドメスティックバイオレンスのからくる心の傷、震災が引き起こした様々の心の傷について述べています。特に私が印象に残っている部分は、子どもの心の傷という第7章です。

小学生くらいまでの子どもは、自分の気持ちを、大人のように苦しい、不安だ、腹が立つ、などと的確な言葉で表現できません。でも子どもも大人と同じように不安や恐怖を感じるけど、表現の仕方が違います。親から離れられない、一人で寝られない、学校にいけないというような行動として現れます。不登校の

裏に何があるか、教職員や周りの大人が問題だと感じる行動の裏に何かがあるのではないかという洞察力が必要だと感じました。

また思春期の場合は、親との関係の悪化、反社会的行動、薬物、非行、「援助交際」、引きこもり、自傷行動などがトラウマへの反応だと小西さんが指摘しています。教育相談を受けている私たちも、心しておかなくてはいけない視点だと思いました。

また虐待の問題にも言及しています。小西さんは、虐待そのもので死ぬこともあるが、自殺、自殺未遂、事故死、薬物・アルコール依存などの状況に陥る人の中に、虐待の既往があることも多いと指摘しています。教育相談を受けるうえでも、トラウマについての正しい情報がとても重要なことだと分かる本でした。